

先生のおむすび

土浦第四中学校 九年 小倉 美南

私は小学校高学年の頃から色々なボランティア活動に参加しています。中学八年生になり、この年は、六カ月かけて活動する、障害を持つ人と一緒にお米を作るボランティアに参加させて頂きました。

お米作りは田植えからスタートしました。高校生や大学生の参加が多い中、中学生は私だけで、お兄さんやお姉さんは一人に対し、

障害を持つ人が二人で、三人グループを作る中、私はまだ中学生ということ、一対一の二人グループになりました。私とグループになったのは佐藤さんという歳上の女の子でした。佐藤さんは知的に軽度の障害を持つ、とても物静かな女の子です。田植えをする中、私は佐藤さんに話しかけました。

「田植えは初めてですか？」

「なんでお米作りしようと思ったんですか？」

私になにを話しかけても、佐藤さんは聞いて

いるのか、いないのか、返事の声すら聞こえてこないの、私もだんだんと無口になっていってしまいました。一日目、私は佐藤さんの声が聞けぬまま、目も合わぬまま、田植えは終わりました。そんな私に、佐藤さんのお母さんが

「この子はいつもこのよ。毎日一緒にいる私ですえ、声を聞くのは稀なことだから気にしないでね。でも言われたことはだいたい理解しているし、気が向けば、一言、

二言、話すこともあるから、美南さんが気になったことは、どんどん話しかけてあげてね。」

と言ってくれました。が、しかし、ボランテアは月に一回か二回集まりお米作りを体験する六月です。私は佐藤さんと二人で楽しくお米を作ることが出来るのか、とても不安になりました。

田んぼに通い、草取りをしていると、周りのグリーフはワイワイと楽しそうにしていま

す。でも私は黙々と佐藤さんの後ろについて
草取りをする日々が続いていました。ところ
がこの日はなぜか、いつも無口に一人で作業
する佐藤さんの手がずくと止まっていた。
抜くべき草と抜いてはいけない稲の違いが分
からないように感じた。

「佐藤さん、これは抜いていいですよ。」
「佐藤さん、これも抜いて下さい。」
そう言うのと、佐藤さんはその草を抜いてくれ
ます。やっと二人で作業が出来た気がして、

私は嬉しくなりました。その時、

「先、生、こ、れ、は？」

と、初めて佐藤さんのゆっくりと話す言葉を

聞きました。それから佐藤さんは私を、

「先、生」

と呼ぶようになりました。

いよいよ最終日、この日は前に刈ったご飯
を炊き、おむすびを作ってみんなで食べて、

半年の作業は終わりにします。

「佐藤さん、ご飯はこの位でいいですか？」

「一緒に座わって食べましょう。」
この時になると、私も佐藤さんも、佐藤さんがあまり話さない事に、なんの違和感も問題もなくなっていました。
「先生、来、年、も、お、米、作、る？」
と、佐藤さんが最後に言いました。「私は来年は受験生だからボランテイアはお休みする事を伝えると、佐藤さんは黙ったまま、少し寂しそうな顔をした気がしました。」

「この子の通う学校の先生でも、声を聞いた

先生は少ないのに、美南さんはすごいね。」
と、言っ て佐藤さんのお母さんは少し泣いていました。

後日、佐藤さんから手紙が届きました。

「先生のおむすびはおいしかったです。」と、書いてありました。

私はお米作りを通して、新しい友だちが出来、新しいなんだかポツとあたたかい気持ちを知りました。あの時、二人で食べたおむすびの味は、絶対に忘れることはありません。